

2020.1.1 第176号 **ながの**
社会福祉士会 NEWS

■発行：公益社団法人長野県社会福祉士会
 会長：萱津公子
 ■編集：広報編集委員会

■事務局：〒380-0836
 長野市南県町685-2 長野県食糧会館 6F
 ■発行部数：2,400部

■TEL：026-266-0294
 ■FAX：026-266-0339
 ■E-mail：info@nacsww.jp
 ■HP：https://nacsww.jp/

目次

■長野県社会福祉士の2020年……………1	■特集 長野県社会福祉士会員
■『台風19号被災について考える』……………2	年男・年女 今年の抱負……………6～7
■台風19号災害支援活動に入って……………3	■多職種ごちゃまぜ学習会……………8
■一般社団法人 全国地域生活定着支援センター協議会	■リレーエッセイ～リレー形式の寄稿～……………8
関東・甲信越ブロック2019年度 専門研修会 ……4～5	■今後の予定……………8
■信州ぐるっと!!……………5	■編集後記……………8

Nagano Association of Certified Social Workers

長野県社会福祉士の2020年
 — 台風19号災害支援に携わって、果たす役割と今後 —

萱津公子

(長野県社会福祉士会会長・台風19号災害支援本部長)

新春を迎え、会員の皆様と関係機関、事業所の皆様に、ご挨拶を申し上げます。

また、改めて昨年10月に発生した台風19号により被災された方々および事業所、機関に、心からお見舞いを申し上げますとともに、被災地等において支援活動に参加いただきました会員の皆様に、災害支援本部長として、改めて感謝申し上げます。

本会は、発災後から「長野県災害福祉広域支援ネットワーク協議会」のメンバーとして、被災者、自治体、地元社会福祉協議会等を外部から側面に支援する活動を続けてきました。発災直後は、DMAT（医療チーム）や保健師チームが主に活動していましたので、保健師等と連携して要配慮者・要支援者の把握とそれらの方々への声掛けや状態確認、福祉的な支援が必要な方を関係機関につないだり、避難所内の環境整備の提案や「なんでも相談コーナー」を設置し、被災者の悩み事の傾聴・受容に努めてきました。

混乱している状況下で手探りではありましたが、自治体、医療、保健、福祉等の分野がそれぞれの役割を担い、連携した活動が展開できたことは、貴重な経験であるとともに、改めて、社会福祉士としての専門性と役割が問われることを痛感しました。

自然災害では、社会的弱者がより深刻な被害を受けます。発災直後の支援、避難所での支援、避難所から生活再建に向けた支援、住み慣れた地域から離れ、新たな環境の中で生活するようになり、孤立等も懸念されます。さらに、避難所を退所後の生活再建に向けた支援など、時間の経過とともに求められる支援は変化していきます。

「平時は有事」「有事は平時」というように、日ごろの社会福祉士としての実践や平時のつながりが有事でも機能し、その専門性が発揮されます。私たち社会福祉士が、日ごろのつながりを有効に活用し、有事にも機能するよう、今回の災害支援の活動から一人ひとりが、自らの専門性について考えるきっかけにさせていただきたいと思っています。

今後の本会の活動としては、被災者支援に関しては、地元自治体や社会福祉協議会などと連携して、「ONE NAGANO」のスローガンを胸に、必要な時に必要とされる息の長い支援活動を継続していきたいと考えています。

被災者および社会的弱者の課題を探り、きめ細かな支援をするために、会員一人ひとりが、熱い福祉マインドを持ち、ソーシャルワーカーとしての知識・技術の研鑽を積み、冷静な判断ができる専門職としてステップアップする1年となるように、活動していきます。

(関連記事2・3面)

『台風19号被災について考える』

～これからわたしたちは何ができるのか？～

甚大な被害をもたらした今年の台風19号。多くの方が被災し、さまざまな不安を感じながらの生活を余儀なくされています。今まで体験することのなかった大災害。専門職として今後の再建・復興に向けて何ができるのか。被災した方への支援事例の紹介と参加者同士の情報交換、それぞれの立場から今後の取り組みについて考える学習会を、11月29日(金)に長野市ふれあい福祉センターで開催しました。

学習会前半では被災者にかかわってきた支援者の視点と、支援側でもありながら実際に自らも被災者となった側の視点で事例をもとに報告していただきました。後半では、事例発表をふまえての情報共有を行いました。

◇ 被災をした方への支援について①

50代の身寄りのない独居男性は精神疾患を抱えて、自宅に住む。発災前の日常では近隣の付き合いは少なく支援者が中心になってかわりを持っていた。緊急時の要支援者登録をしており、避難指示が出る前の避難場所の確認や発災直後の安否確認等のケアをした。その後も家の片づけ等を一緒に行い、在宅生活を継続できるよう、自宅再建までの生活環境の変化に向き合っていかなければならない本人に寄り添いながら、支援を継続している。

◇ 被災をした方への支援について②

60代の外国人の独居女性は精神疾患と腰痛を抱え県営住宅に住む。会話が苦手で、ほぼ毎日ヘルパーが入る。普段から自宅で過ごすことが多かった。発災直後、浸水に気づき近所のお家で救助隊につながり避難所へ移動した。避難所で自然にできるグループに入れず孤立してしまいストレスを抱えてしまう。支援者側で、早急にグループホームへの入所の手続きをとり、生活拠点を移して安心できる環境で生活ができるようにした。

◇ 被災を受けた当事者として感じたこと

発災後にわかってきたこととして、外国の方やさまざまな障がいをお持ちの方が自分たちの地域にこれほど多くいたとは知らなかった。

また避難情報も行き届いていなかったことにも驚きを感じ、自分の街の住人について知り合えていなかった。「独居の人やつながっていない人、つながりのない人たちの支援は誰がやるのか」と改めて思った。

発災直後は自分たちのことで精一杯、気にはなるが実際手助けをるところまで至らず、もどかしかった。

● 災害時に露出する情報弱者のそれぞれの課題について

高齢者や聴覚障がい者の防災無線が聞こえないといった「聞こえ」の保証などをどうとらえるか。被災後対応に関する正確な情報をどのように共有するか。例えば、石灰に関しても支所では効能や使い方をあまり理解されないまま配っているところが多かったというような、事前に整理するべきノウハウの蓄積と共有。

● 今後の生活再建の方向性にどう寄り添うか？

今回の長野市北部のような地域では、リンゴ農家だから親の年金とリンゴの収入で生活をやっていける場所もあった。でも家や畑が浸水してしまい、たとえ家を直したとしても畑がダメなら生活は継続できないという声も聞かれた。

● ソーシャルワークと被災者の自立支援

「元通りの生活に戻りたい」と願う被災者の自立支援には、被災する前の隠れていた問題も一緒についてくる。元に戻る道筋は自分でつくるべきだが、自分でつくりえない人はどうすればいいのか。

再建に向けて、どう選んでどう決定するのか、揺れを含めて、その自己決定に寄り添うこと、そして被災を教訓に今後どのように付き合える地域であるべきなのか、とても幅広く細やかな課題がある。今回の学習会は通常業務に加え災害支援対応の中で行われたもので、それぞれ疲労感もかなりあり、互いに労いながらも、各現場から活発な意見が出され濃密な情報共有が図れたと感じられる学習会となった。

台風19号災害支援活動に入って

【災福ネットの活動について】

青柳 與昌（社会福祉法人長野市社会事業協会）

平成31年2月6日に長野県災害福祉広域支援ネットワーク協議会が設立され、長野県社会福祉士会も県の福祉団体の一つとして官民21団体で構成される通称「災福ネット」の構成団体として参加しました。

災福ネットでは、以下の3点を活動内容として掲げました。

- ① 福祉事業所間の災害時相互応援の仕組みづくり
- ② 災害派遣福祉チームの養成
- ③ 福祉団体間の連携促進

そして、「長野県災害派遣福祉チーム員養成研修」を8月に長野と松本で行い、チーム員の登録を開始していましたが、この段階で10月の災害発生となってしまい、長野県からの派遣要請に応え避難所支援にあたりました。社会福祉士会にも派遣要請があり会員に参加を要請。社会福祉士会としては、延べ115人を派遣しました（12月6日現在）。

専門職団体の派遣は、「外部支援者として、謙虚な気持ちで必要な事柄を粛々と行い、地元を応援する。」「権利擁護の視点と高い倫理観を忘れず、責任感をもって相談対応を行う。」こうした点の遵守を注意しました。それでも、つい支援に熱が入りすぎ外部支援者の域を超えて、関係者にご迷惑をかける場面もありましたので、今後のさらなる研修の必要性も感じています。今回群馬DWA Tの応援を受けました。さまざまなノウハウを活かして外部支援者としての支援を学ばさせていただきました。また、被災者支援は終わりではありません、息の長い活動が求められます。そのどこかの場面で我々社会福祉士が支援できると考えています。



【台風19号被害の被災地での支援から】

北原 由紀（ゆらり相談支援センター）

台風19号の災害では災福ネットの一員として発災直後の先遣隊、また障がい当事者のお宅の被災ゴミの撤去、11月からは避難所ルールも知らぬまま、長野県ふくしチームとして長野市豊野町の避難所での活動へと移りました。

段ボールベッドの上で避難所生活が展開されている中、長野県ふくしチームは「地元の人」として、既に10月から活動していた群馬DWA Tと共に認知症・8050・経済面等、福祉ニーズのある方々の今後について避難所の保健師と検討し、支援機関につなぐ等の活動を行いました。また避難所運営側からは今後の住居に焦点を当てたニーズ把握の依頼があり、個別にお話を伺う活動が中心となりましたが、住居を決められない方も多くいらっしゃいました。

対話の中で気付かされたのが「情報不足」でした。今後の住居を決めるという大事な決断を前に必要な情報が得られておらず、情報に関する支援の必要性を強く感じました。そして避難所で「黄色いチョッキの人」と声をかけてくださった方々の今後の地域生活をどのように支えていくのか…。

避難所生活を通して見えた「意思決定」「地域生活」の課題。活動が終了した今、深く考えさせられています。

一般社団法人 全国地域生活定着支援センター協議会 関東・甲信越ブロック2019年度 専門研修会

「全国地域生活定着支援センター協議会 関東・甲信越ブロック専門研修会」は、2019年11月7日(休) J A長野県ビルアクティール、8日(金)に長野市生涯学習センターで開催され、県下および関東各地から160人が参加した。この研修会は、「高齢・障がいにより自立更生が困難な刑務所等出所者を支援する」事業を受託している関東甲信越11県の地域生活定着支援センターが一堂に会し、司法や福祉機関、地域の方々に向け、毎年企画・実施しているもので、本年は長野県で開催された。

< 1日目 基調講演 >

演題：地域で本人の「危機対応レジリエンス」を支えるために一を支える人垣「TSネット」と介入支援プログラム「SOTSEC-ID」実践から

講師：堀江まゆみ氏

(白梅学園大学 教授。権利擁護研究として厚生労働省「発達障害者支援のための地域啓発プログラムの開発研究」などに取り組み、現在は、権利擁護・成年後見活動のための「NPO法人 PandA-J」代表を基盤に権利擁護活動を研究し実践している)



トラブルシューター (TS) ネットやPandA-Jの活動実践を通して、触法者の立ち直り支援のポイントや課題等をお話しいただいた。

SOTSEC-IDとは、英国で開発された性的問題行動のある知的・発達障がい者向け問題修復プログラムで、

ソーシャルスキル習得、認知行動モデル、被害者への共感、衝動コントロール、再発防止グッドライフプラン作成等をベースに半年～1年実施していくものである。

実際には、これまで学ぶ機会がなく知らないことに対して、知った顔をする、迎合するという誤学習してしまっているところへの新学習の機会を創出していたり、大人と対等に話したことがない人たちに対し、同じ目線で対等に話すことなどを多くのスタッフとともにクローズで実践していく。そうした実践を通じて痛みを共感することができたり、聞いてもらえたという成功体験が「アンカー効果」となり、本人にはまた2年後5年後思い出すと、立ち直りのきっかけの1つにもなる。

レジリエンスとは、心理用語で「弾力性、回復力」という意味。人間が誰にでも持ちうるもので、苦境に置かれても困難に耐え自身を修復していく力や心の回復力、適応する力を指す。阪神淡路大震災の時にも注目された。触法者の多くは困難な状況に置かれていることも多いが、どんな方も必ずやり直しがきくということ、支援者は回復していく力をアシストしていくことが大切。またそうした方の多くは孤独であり、人とのつながりが失われている。とにかく1人について20人くらいの関係者をつくる。人垣をつくっていくことが重要である。

< 2日目 第1分科会 >

■テーマ 『なぜやり直すことができたのか？当事者と支援者に聴く』

- 登壇者 荻谷 遼氏 (長野少年鑑別所 専門官)
" 長坂 平和氏 (NPO法人ワーカーズコープかがやき 支援員)
" 西澤 幸子氏 (アパート大家)
" 大蔭 智子氏 (長野県地域生活定着支援センター 主任相談員)
■コーディネーター 石川 貴浩氏 (長野県地域生活定着支援センター センター長)

○刑務所を入退所されている当事者に登壇いただき、お話しいただく予定であったが、分科会直前で再犯し逮捕となった。当日は本人不在の中、本人の思いが綴られた資料をもとに、刑務所の入退所を繰り返す方をどう支えていくのか、何が必要なのかを、支援者と共に共有した。

荻谷氏：支援によって犯罪のない生活パターンで進んでいっても、多くの方がまた不安や怖さで普通の慣れ親しんだ犯罪といった適応パターンに戻ってしまう「揺り戻し」は必ず来る。そこで戻らないように支えたり、前に進む勇気を与えたりすることが必要。それを繰り返しながら「やらない日々」を重ねていくことが大事。

長坂氏：受け入れに不安がなかったわけではなかったが、実際に会い、本人の思いや人柄や丁寧な仕事ぶりなどを目の当たりにすることで不安などなくなった。自然と「AさんはAさんじゃないか」という同じ人と人という就労仲間の関係性で向き合い関わったことがポイントであったかもしれない。

西澤氏：人は住む所がしっかりしていないと落ち着かないのではないかなと思う。今回のかかわりの相談を受けた際、もう一度本人を信じてみようと思った。本人と向き合った際、思いに嘘はないと感じた。窃盗にばかり目を向けなくて、その方の本質部分を見ていくことは大切。罪を憎んで人を憎まずではない



が、みんな同じ。また戻ってきても受け入れていきたい。

大蔭氏：受け入れ相談の際、リスクがあると「何が起こるかわからない」「責任を取れない」などを理由に受け入れてもらえないことが多い。制度とサービスばかりにとらわれず、どうしたら受けていけるかを検討していく。支援者側もそうした感じ方、感受性があると再犯をした方を寛容に受け入れてもらえる地域になっていくのではないと思う。Aさんの支援の局面としてはこれからは地域力・支援力共に正念場だと感じている。

石川氏：出所者に対するかかわりや支援は専門的であったり特別なものではなく、基本は通常の高齢や障がい、生活困窮者と同じ当たり前の支援である。「普通に、当たり前」を丁寧に積み重ねていく。もし本人に危機的状況が降りかかっても、支援者は一番に信じぬくことが大切。立ち直り支援についても、本人のサインを見逃さないこと、そして支援者が決して手を離さないこと。もし再犯しても、機関が連携し途切れない支援を実現していくことが必要である。

< 2日目 第2分科会 >

■テーマ 『支援プロセスの中から支援のヒントを探る』

■登壇者 茂木 普照 氏（群馬：社会福祉法人 太田松翠会 宿泊型自立訓練事業 かなやま青年寮 管理人）

〃 服部 敏寛 氏（山梨：社会福祉法人 三富福祉会 ハロハロ相談支援部 所長）

〃 本多 崇人 氏（新潟：新潟県地域生活定着支援センター センター長）

■コーディネーター 高津 務 氏（群馬県地域生活定着支援センター センター長）

○3県（群馬・山梨・新潟）の福祉事業所、定着支援センターからの実践報告をもとに、事業所の基本姿勢や支援者の共通認識、アセスメント・トラブル対処方法など支援のポイントを会場全体で共有した。

茂木氏：かなやま青年寮を必要としている人達は、障がいの程度や種別だけでなく、性格、年齢、性別、育った環境など一人として同じ人はいない。私たちは、いつも一人ひとりに対して必要な支援を作っていかなければならない。我々がやるべきことは何か、今やっていることはその目標に合っているか、どうすればできるのかを常に考え続け「行動」することが大切である。

服部氏：本人が自分らしく生活し続けることができるように環境（相談員、支援者も含む）を整えていくことが大事であり、問題行動にだけ目を向けるのではなく、水面下をアセスメントし、環境・状況に適切にアプローチする。また、ストレングスモデルの事例検討を支援チームで実施し、強みと支援の方向性をチームで共有することが大切である。

本多氏：アセスメントによって、なぜ、犯罪行為に至ったのか、その背景（社会的孤立や生きづらさ）に目を向けることが重要。課題としては、ソーシャルワーカーの力量やアセスメントの限界、矯正施設という枠の中であり、出所後に再アセスメントが必要であるという点が挙げられる。

高津氏：施設では見立てが重要。見立てができれば、地域移行時に新たな支援者に引き継ぐことができる。また、「人づくり」も大切。支援者と本人との関係づくりから始め、相手がこちらを向いてくれるようになるまで何度もかかわり続ける。キーパーソンになれた時、そこから人づくりがやっと始められる。



信州ぐるっと！！

「終活ノート作成支援事業について」

有賀 圭 吾（泰阜村社会福祉協議会 地域福祉課）

私は泰阜村社会福祉協議会にて終活ノート作成支援事業に携わっています。これは平成30年の4月から泰阜村より委託を受けてスタートした泰阜村の独自事業です。「終活ノート」と聞いてなんとなく想像がつかかもしれませんが、簡単に言うと、本人へヒアリングしながら社会福祉協議会職員がエンディングノートの作成を代行する事業です。お陰様で平成30年度は12人の申し込みがあり、まずまずのスタートを切ることができました。

この事業がスタートした当初はどこまで受け入れてもらえるか不安でしたが、実際に老人クラブや地区の集まりの中でPRしてみますと「これは大事なことだよ」と反応してくださる方がほとんどであり、また前からエンディングノートを作ろうと思っていた、という方が予想以上に多く、終活への関心の高さを感じました。

エンディングノートと聞くとなんとなく暗いイメージになりやすいので、実際に本人にヒアリングする時にはご自身の若い時や、輝いていた時のことからお聞きするようにしています。そうすることで、自分の人生を振り返っていただく中で自然とこれからの人生（終末期）を考えていただきやすくなります。まだまだ歴史が浅い事業ですが、これからも村民の皆様にとってよい事業となるように活動していきたいと思っております。

北信地区

氏名：水澤 真
 所属：千曲市社会福祉協議会
 入会年度：平成28年度



趣味・最近ハマっているもの：

『野球観戦（スポーツ）』
 長男といろいろなスポーツを観戦しています。野球は埼玉西武ライオンズのファンで、年に数回、家族や友人たちとメットライフドームへ出かけて観戦しています。最近では、私よりも長男の方がスポーツ選手を知っていたりと、私も勉強しなきゃなと思うこの頃です。

平成の思い出：

『全部です』
 思い返すと、平成31年の中で、小中高、大学、就職、結婚、子どもが生まれる等とたくさんの思い出があり、何が一番とは決めかねるので、今ではそれぞれ「全て」が良い思い出です。（嫌なことはただ忘れてしまっているのかもしれない…）

職種・業務内容

社会福祉協議会の相談支援課で、貸付や成年後見制度の仕事に携わっています。行政や専門職、地域の方々などさまざまな関係者や関係機関の方と連携をとりながら相談支援を行っています。

社会福祉士として心掛けていること

学生時代、接客業でアルバイトをしていた頃に、「店員にとってはたくさんいるお客さんのうちの1人だけど、お客さんにとってあなたはたった1人の店員であることを忘れないように」と教えてもらったことがあります。そのことは、社会福祉士になってからも心がけています。そこにあなたがいて良かったと思われるよう、日々取り組みたいです。

年男・年女としての1年の抱負

最近、年齢のことはあまり気にしておらず、今年年男ということはこの企画で気付きました。特に、何か計画等はありませんが、いつも以上に家族、友人、仕事も含め、その過ごす時間を大切にしていきたいです。



東信地区

氏名：菊池 智子
 所属：上田市社会福祉協議会
 入会年度：平成24年度



趣味・最近ハマっているもの：

『スポーツ観戦』
 昨年は、サッカー日本代表やバドミントンの試合観戦に、横浜、東京、埼玉と出かけました。テレビ画面の方が選手もアップで映るし解説も聞けるとはいえ、生で観戦するワクワク感にすっかりハマって楽しんでいます。

平成の思い出：

『平坦じゃなかったけど成し遂げた』
 大学受験は過去最高倍率の受験戦争期、就職時はバブル崩壊後の超氷河期と言われ、勝ち組、負け組というワードに翻弄されました。そんな時代を経て、何か専門職として働こうと決め現在に至ります。母親としては長女が成人し、子育てを一つ成し遂げたかな。

職種・業務内容

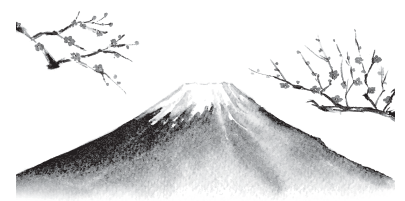
地域のつながり支援から、日常生活自立支援事業での個別支援まで、幅広い業務を担当しています。地域の自治会長や民生児童委員とのかわりも多いです。地域の福祉力をさらに高めるために、地域の皆さんと一緒に考えていくことにやりがいを感じています。

社会福祉士として心掛けていること

人の気持ちをよく理解すること。そのためには、相手とのコミュニケーションが大事だと思っています。相手に対して、「どんなことも受け止めるよ」という空気感を常に持っていたいと思っています。

年男・年女としての1年の抱負

ネズミ年は新しいことを始めるのにいい年と聞きました。どんなことにも臆せずチャレンジしていきたいと思います！そしてスポーツを観戦するだけでなく、今年こそ自分の体を動かして運動不足を解消しよう…。



「令和」を迎えて2年目。今年の干支「ねずみ」のように小回りを利かせて日々業務している各地区の年男・年女の会員に、社会福祉士として心がけていることや、今年の抱負を聞きました！

中信地区

氏名：宮島涼平
所属：株式会社タカミロ
入会年度：平成23年度



趣味・最近ハマっているもの：

『スポーツ観戦』

スポーツ観戦とは言っても自宅でインターネットで配信されているスポーツの観戦ですが…。競技場での観戦も好きでサッカーは観に行くこともありましたが、最近は自宅に居ながらサッカーをはじめ世界中のスポーツがいつでも観れるインターネット配信で楽しんでいます。

平成の思い出：

『平成23年・26年・27年・29年』

人生の殆どを平成で過ごしたので思い出はたくさんありますが、中でも平成23年、26年、27年、29年は特別な年でした。平成23年は今の仕事に転職した年で、さまざまな方との出会いがありました。26年は仕事で一緒した方からの紹介で結婚した年、27年は第一子が誕生した年、29年は第二子が誕生した年。平成23年からは良い思い出しかありません！

職種・業務内容

福祉用具専門相談員をしています。仕事では旧姓の粕尾のままで働いています。

業務は在宅で要介護認定を受けている方に対して、介護支援専門員をはじめ専門職の方たちと協力しながら、自宅等で生活が送れるよう、その方の希望や心身の状況、住環境に適した用具（車いす、介護ベッド、手すり等）の相談、取り付け、調整等を行っています。

社会福祉士として心掛けていること

相手にわかりやすく伝えること。

自分にとっては日常的に使用している専門用語などは使わずに、わかりやすい言葉や表現を用いて話すこと（お渡しする文書を含め）を心掛けています。

年男・年女としての1年の抱負

年男はあまり関係ないですが、自分に起こる事や今すぐ必要のない事でも「人生に無駄な事はない、いつか役に立つ」と前向きにさまざまなことを経験して成長していきたいと思います。

あとは健康で過ごせるよう運動すること！漠然とでは続かないと思うので、マラソン大会に出ることを目標にして取り組みたいです。

南信地区

氏名：大輪恭兵
所属：㈱介護センター花岡
入会年度：令和元年度



趣味・最近ハマっているもの：

『通勤しながら聞くラジオ』

自宅から職場まで車で1時間以上かかるため、最近は退屈な車の中でラジオを聞きながら通勤することにハマっています。しかし、たまにラジオに反応して独り言を言っている時、ふと虚しさを感じます（笑）

平成の思い出：

『大学の友人との卒業旅行』

平成の最後に、大学でいつも一緒にいた友人と4人で大阪へ卒業旅行へ行ったことが印象に残っています。4年間支え合った友人と楽しく、また、卒業を控え寂しさを抱えながらの旅行は一生の思い出です。大学だけでなく、平成で出会った友人たち恩師の皆さんに感謝です。

職種・業務内容

福祉用具貸与・販売事業所で、福祉用具専門相談員として業務を行っています。介護保険サービスでは、介護支援専門員が作成するケアプランに則り、私たちは福祉用具のレンタルや販売を行っています。私は主に介護ベッドや設置型手すりなどの大きい福祉用具を担当する部署にあり、利用者の自宅や施設に出向き搬入・搬出、説明等を行っています。

社会福祉士として心掛けていること

利用者、また家族の方の思いに敏感になり寄り添うことを心掛けています。営業活動の中で、利用者本人はもちろんですが、家族もさまざまな思いがあることを感じます。中には本人と家族の考えが相違っていて葛藤を抱えていることもあります。それぞれの思いや考えを受容し、何を知りたいか、何が分かれば生活のヒントになるのかを考えながら会話・説明することを心掛け、福祉用具を通して生活の幅を広げるお手伝いをしています。

年男・年女としての1年の抱負

今後の社会福祉士としての活動のために、福祉用具の知識やスキルは大きく役立つと思っています。まだまだ吸収することがたくさんあるため、利用者から学ぶという姿勢を大事にして、毎日が勉強だと思いながら業務に励みたいですし、また、自身の成長を信じて、さらに努力をしていきたいです。

多職種ごちゃまぜ学習会 どう進める？どう取り組む？住民・他職種（機関）連携 生活支援コーディネーターの実践から考える ～企画シートを活用して連携の手法を学ぼう～

日 時：2019年11月8日(金) 19：00～20：45
場 所：特別養護老人ホーム 岡田の里
ファシリテーター 津久井 芳明氏
助言者・説明者 田中 雄一郎氏



福祉活動委員会中信支部の主催で中信地区学習会（子ども・障がい・高齢・地域福祉部会合同）として、はじめに中信支部支部長田中氏より「生活支援コーディネーターって何をする人？」と題して資料を用いて説明があり、その後ファシリテーターの津久井氏より企画シートの活用方法について解説があった。

参加者は社会福祉士会会員12人で、所属地域は大町市、安曇野市、山形村、松本市、塩尻市と各ブロックから集まった。生活支援コーディネーターについて初耳という会員から、事業整備を担っている会員もおり、それぞれの地域における事業の整備状況や特色について報告し合った。短時間の学習会で制度や事業の概要と、多職種・多機関が連携するための手法を学び、さらに各地域の実情を知ることができるのは地区学習会の強みであると実感した。

リレーエッセイ～リレー形式の寄稿～

「地域密着型消防団員ソーシャルワーカー」

蒲生 俊 宣（上田市川西地域包括支援センター）



平成20年に社会福祉士の資格を取得、その年に長野県社会福祉士会に入会、約10年が過ぎました。これまで約10年間、基礎研修は受けず、地区総会にも参加せず、役にも就かず、諸会員の皆さまには申し訳ないような不良社会福祉士として過ごしてきました。

その間私が何をしていたかという、地元の消防団活動に精を出していました。管轄地域を巡回して火災予防広報を行ったり、先日の台風19号が襲来した際には土嚢を積み走り回ったり、住民に避難勧告をして回ったり、林野火災の残火処理のために約20kgのジェットシューターを担いで登山をしたこともありました。また学生時代から行っていた楽器演奏の技術を活かし音楽隊員として各地で防火演奏を行ったり、バイクの免許を活かしバイク隊員として行方不明者の捜索に当たったりと、年間200日以上を消防団活動に費やしてきました。

当市の消防団には、多職種に就く老若男女が約2,000人在籍しています。団歴は今年で14年目となり、気がつけば広大な消防団員ネットワークが出来上がっていました。そのネットワークは奇しくも『多職種ごちゃまぜ』を掲げる生活支援コーディネーターの業務に大いに役に立っています。

少子高齢化の煽りを受け、消防団員の高齢化も進んでいます。役目を終えられる日がいつになるのかは分かりませんが、役を終えた暁には真剣に社会福祉士の道を歩もうと自分に言い聞かせながら、今日も地域を飛び回っています。

※次号は、長野大学実習室 比田井 友香さんにバトンタッチします。

今後の予定

最新の予定は、本会ホームページ (<https://nacs.w.jp/>) をご確認ください。

日時(曜日)	事業名・研修名	会 場
2月16日(日)	南信地区総会・「こども食堂の今とめざすもの」セミナー	諏訪市総合福祉センター
2月22日(土)	東信地区総会・「災害時支援」シンポジウム	浅間総合病院
2月22日(土)	中信地区総会・「地域共生社会の実現に向けて」セミナー	松南地区公民館（なんなんひろば内）
2月29日(土)	北信地区総会・「福祉専門職の使命・役割を考える」セミナー	にじいろキッズらいふ

◎ 入会状況（2019年11月末現在） * 会員数：1,168人 入会率：28.39% 人口10万人あたりの会員数：56.26人

編集後記

昨年10月に発生した台風19号では長野県においても甚大な被害がもたらされ、多くの人の力によって支援が継続されています。あらゆる人や組織が連携・協働のもとで復旧・復興の支援をすることは、まさによく聞かれる「ごちゃまぜ」の支援といっても過言ではないでしょうか。今回被害がなかった地域においては、いつか自分達の地域でも同じようなことが起こるかもしれないという声が聞かれています。社会福祉士としてできることを各々の領域や地域で考え行動したいですね。
(K・K)